

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 8 NO. 2

(通巻 31号)

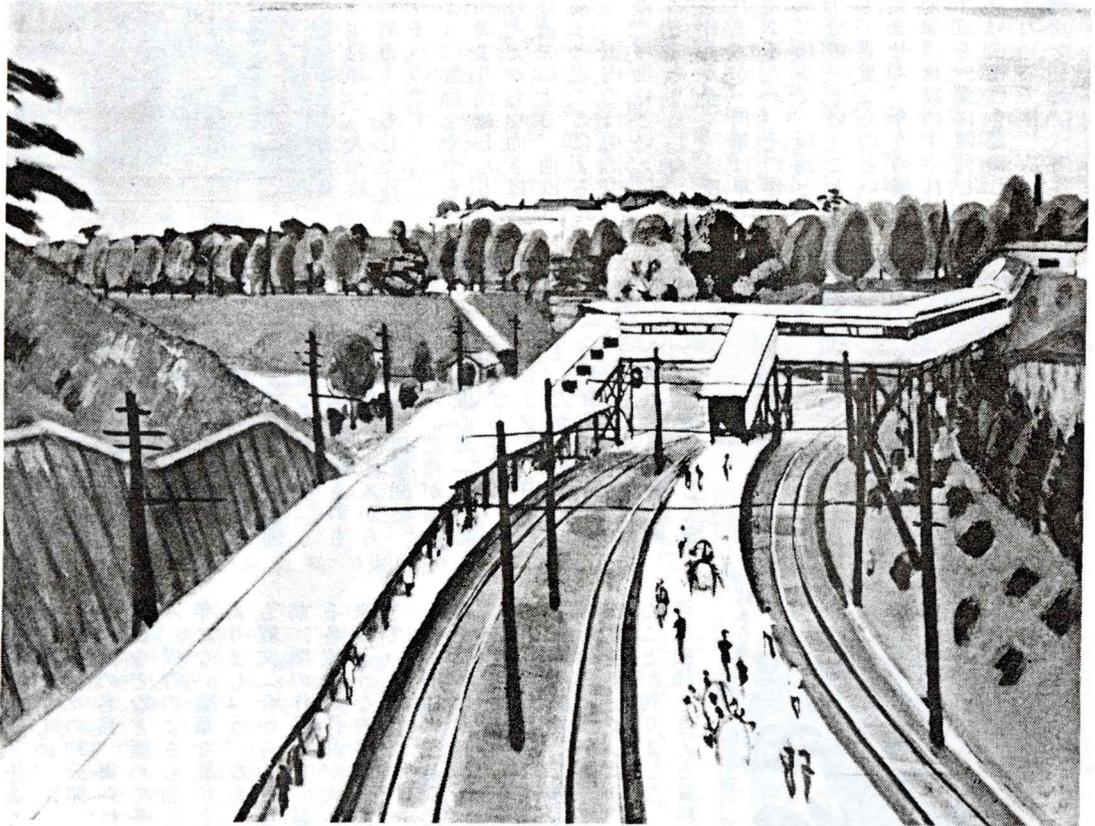
昭和56年 7月20日発行

編集・発行人 高橋 在久

〒 260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎ 0472-42-8311 (代表)



中西利雄「曇り日の離宮と駅」

観潮台

昨年度、市内のS小学校に「小学校における美術館を利用しての鑑賞指導のあり方について」というテーマで研究をお願いした。

報告書によると六年生一五〇名が本館の収蔵作品展を鑑賞したとき、最後に自分が一番気に入った作品の前に立たせたところ、教師側が予想していた写実的で理解しやすい作品には人気がなく、意外にも抽象的で感覚的な独自性の強い作品に集まったという。

たとえば「INSECT」(蜂囀)と題する作品について「色があざやかできれい」「表現方法が独創的である」「カメラリが何かをうかがっている感じ」など現代っ子の美的感覚の一端がのぞかれる。

また、美術館の利用については高学年になると自分の作品について反省する態度が育ってくるのでこれに合わせて原画を見せることは、かくれている創造力を触発し、美意識をかきたてるのに役立つことになりうと結んでいる。ゆとりのある教育の一例である

(安増 順)

《特別展》

肉筆浮世絵展

山口 桂二郎

(立正大学教授
日本浮世絵協会常任理事)

日本の絵画は江戸時代になって一段と多彩を極め、多くの画系を形成しましたが、その諸派のなかにあつて、庶民の町絵師が、庶民のために、庶民の生活を描いたのが浮世絵と呼ばれるものでした。浮世絵の特色の一つに、肉筆と版画を共有していたことがあげられます。浮世絵といえば版画というように考えられて、とかく肉筆画の方が等閑に付される傾向がみられますが、浮世絵にあつては、肉筆画がその本流であると考えべきです。庶民の生活を描くことは信長・秀吉時代から初まり、これを近世初期風俗画と呼んでいますが、この肉筆画の系統をふまえたのが浮世絵であります。そのため版画に創作した人々も当然肉筆画にも筆をとり、優秀な作品を遺し、自らを純粋な日本画

の流れをくむ絵師とする自負を持ち、「日本絵師」「大和絵師」などの肩書をしるした作品もかなり多いのです。

現在のように版画をややもすれば、肉筆より優越したもののようにならぬがちな向きは版画の海外流失による、西欧の評価が高まったことによるのであつて、国内では明治中期頃までは、浮世絵といえは肉筆画のことでありました。版画は同じ作品が多く、一度に制作されますが、肉筆は単一な作品であるため、その作品数が極めて僅少で、版画と比べて何千分の一ということにおいても、貴重なものといわざるをえません。今度の展覧はこの肉筆浮世絵のすぐれた名作数十点を一堂に陳列して、その高い芸術性を認識していただきたいと思います。次にその中の幾点かを選び、内容

にふれてみたいと思います。

「真崎の図」「西行図」などは、林若樹旧蔵のもので初公開の作品。なお扇面画の蒐集では、旧鴻池のものが最大で九百八十本を誇っています。普通は骨を取つたものが多いのに対し、今回出品の扇面は骨つけのままであり、扇面画としては貴重な存在です。「まいかの図」も同様骨付きのもので、二・三年前スイスから里帰りした作品。「肉筆画帖」は天保飢饉の時、北齋が描いたもの。飯島虚心著「葛飾北齋伝」に登場する作品で、数年前ニューヨークより日本へ帰ってきましたが、去年のフランスでの北齋展に出品され大好評をえました。日本では初めての公開。「扇子書く美人」は栄之の代表作として定

評のある傑作。上品な描写は栄之独自のもの。

以上数々の初公開、所在不明の幻の名品、海外にあつた作品などなど極めて多彩にとみ、保存のよさも加えて、近年にない豪華な展示となるであります。なお、寛永から寛文(今から約三百五十年前)頃の作品から、幕末に至る各流派の作品が大体系解出されるような内容の豊富さをもつています。

千葉県は浮世絵師との関係は大で、浮世絵の筆頭に立つ師宣の出身地で、英泉も木更津の近くの出身、北齋は下総葛飾郡の出身、広重も「武総名所絵日記」が県内で発見、広重自身しばしば訪ずれていたことが判りました。千葉と浮世絵師を考える資料が展示

される他、版画と肉筆の関係資料も共に一見出来るのも大きな収穫といえましょう。

さらに大きな名作の絵馬が数点程展示されることは、浮世絵師の絵馬執筆の内容を知る上で前例がなく、このたびの展示の圧巻となると思われ

ます。

今回は千葉県における浮世絵師の活動資料も合わせ展示するとのことであり地元の方々にも興味深く見ていただくと確信する次第で、これによって浮世絵に対する関心をより深く持たれ、世界に誇る日本の芸術浮世絵の真価を広く理解されることを祈つてやみません。

なお同展は九月十二日(土)より十月十四日(水)まで本館一、二、三室で開催されます。



北雲画「美人と達磨」

展覧会案内

房総の美術家
シリーズ (II)

浅井真展

7月23日(休)〜8月20日(休)

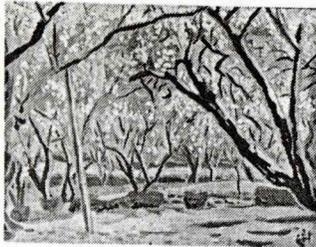
本館では、開館以来、本県ゆかりの美術家を調査研究し、その紹介と顕彰を行なっています。本年度は、「房総の美術家シリーズ」の十一回目として、洋画に優れた技量を示した浅井真に焦点をあてました。

彼は、明治三十二年千葉市に生まれ、伯父、浅井忠により真と命名されました。幼少年時代を弘前市や千葉市で送り、千葉中(現千葉高)で学びましたが、当時の美術教師は、近代洋画の発展に功績のあった堀江正章でした。

千葉中を卒業した後、大正一〇年、太平洋画会研究所に入所して、本格的に洋画を学び、大正十三年には、第五回帝展に初入選しました。それ以後、帝展、文展、日展に秀れ発表すると共に、太平洋画会会員としても活躍しました。そして、戦後まもなく、画壇との交流を断ち、独り描

き続けましたが、昭和五十五年、惜しくも逝去されました。彼のモチーフを大きく分けると、花、林、岩、裸婦、風景一般の五つになるようです。これらを幾年も飽くことなく、繰り返し描き続けたことに、この画家の真摯な創作態度が充分うかがい知れます。

本展覧会では、彼の残した作品を出来るだけ多く展覧し、その軌跡を広く県民に紹介するものです。油彩作品を中心に、一〇〇余店の展示を予定しています。作品は、「ばら」「ネギ坊主」「ベゴニア」「タンポポ」「ポピー」「牡丹」「シクラメン」「花菖蒲」「梅」「梅林」「唐松林」「水辺のポプラ」「林」「新緑の雑木林」「夏木立」「晩秋」「秋



浅井真「梅林」

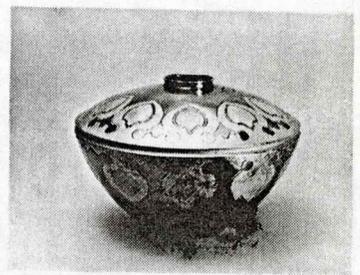
の白樺林」「佐渡の岩」「雪と石」「大海海岸」「五月の海」「房州波太」「裸婦A」「裸婦B」「裸婦C」「井之頭公園」「秋の山」「早春」「夏雲」「伊那谷の秋」等です。

金工芸・信田 洋

回顧展を終えて

本展覧会は、七月七日(火)から十九日(日)まで開催しました。金工芸、特に彫金作品の繊細で優美な姿に、観覧する人々は、強く心を引きつけられ、また卓越した技術に魅せられたようでした。

その作者である信田洋氏について、今一度、ここで振り返ってみたいと思います。信田洋氏は、明治三十五年、東京都日本橋に生まれました。大正十一年、東京美術学校(現芸大)彫金科へ入学、以前より教えを受けていた北原千鹿のもとに創作活動に従い、金工研究団体「工人社」などに作品を発表しました。昭和初期より千葉市稲毛に在住し、昭和五年、第十一回帝展に初入選、以後、主に、帝展、文展、日展を舞台に力作を発表



信田洋「銀壺(花ひらく)」

し続け、創造性に富む独自の美の世界を築いてきました。この間、昭和九年、第十五回帝展に特選受賞、昭和二十六年、二十五年第二回芸術選奨文部大臣賞を受賞するなど活躍し、また日展審査員をはじめ、評議員、参与等を歴任。その他の金工団体にも参加して指導的な役割を果たしています。特に、本県では、千葉県美術会をはじめ、千葉市美術協会などで長年、重責を荷い、本県の文化振興に大きな功績を残しています。昭和四十六年、県教育功労者、昭和四十七年、県文化功労者の表彰を受けました。また、昭和四十七年には、勲四等瑞宝章に叙せられています。今回の展覧会は、氏のこれまでの軌跡を回顧するため、日展出品作品をはじめとする

昭和初期から現在までの作品五十七点を展示しました。その作品は次の通りでした。

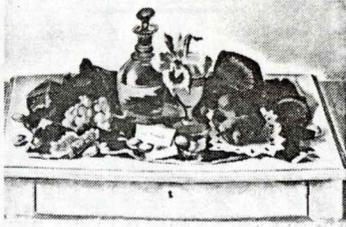
- 「銅花瓶(馬)」「蘭鈕香炉」「蒸発用湯沸瓶」「白銅組込花器」「彫金水差瓶」「小紋象嵌素銅花瓶」「黒味銅切嵌の鉢」「黄銅燭台」「鶉文銀瓶」「透鉢水瓶」「鳥花文銀酒瓶(土筆文洋酒孟付)」「芙蓉置物」「象嵌鉄角盆(鳩鶴)」「象嵌小紋花瓶」「押出壁懸(冠)」「銀の瓶」「黄銅花いらす」「盤」「花器(伸びゆく湾)」「装瓶(楼)」「黒孔雀の瓶」「透壺」「装瓶(黒艦)」「銀壺(花ひらく)」「彫金額(きつね)」「ひさ古瓶」「額面」「九曜盤」「銅瓶(六文銭)」「帯装瓶」「立姿瓶」「麦秋瓶」「布目象嵌銀瓶」「銀壺(五月晴)」「一輪生(端午)」「飛鳥瓶」「黄銅皿(麒麟)」「飛鳥銀壺」「銀飾皿(花菖蒲)」「幽黒瓶」「赤銅張小筥」「赤銅壺(作品七十三番)」「赤銅香炉」「銀瓶(スクラム)」「蘭鈕炉」「赤銅香炉」「乳装銀瓶」「鶴首銅瓶」「銀瓶(マーキユリー)」「銀香炉」「金彩壺」「水指(蘭鈕)」「銀杓立」「銀蓋置」「ひさ古瓶」「名刺盆」「金冠銅瓶」

新収蔵作品紹介(Ⅱ)

購入

板倉 鼎

「静物」一九二七年
「金魚」一九二八年



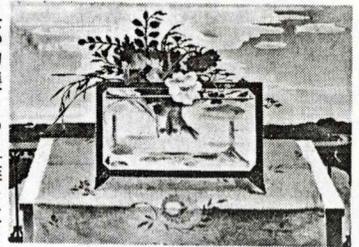
板倉 鼎 「静物」

昨年一月、(房総の美術家シリーズ)としてとりあげ紹介した「板倉鼎」展を御覧いただいた方も多いと思うが、この二点は、その時には出品されていなかった。板倉鼎は一九〇一年松戸市に生まれ、千葉中を卒業後、東京美術学校に進んだ。一九二六年、夫と共にフランスに留学。独自の画風を追求して努力を重ねたが、一九二九年九月、帰国を目前にして、急病のため

二八歳の若さでパリの地に客死した。

これら二つの作品は、いずれもパリに於ける制作であり鼎の画風がようやく独自のスタイルを持ち出した作品である。一九二七年七月八日付けの父母への手紙に、在パリ一年を迎える心境を述べている。(鼎達は、前年の七月三十一日にパリに到着している。)一年を振り返って自分の仕事がありはかどっていないこと、あまはやく思いながらも、当初の計画、即ち、自分の持っていた型を打ちこわす努力が、実を結びつつあることを喜んでいる。(略)今度同じものを二度つづけてかきました。静物において少くとも自分では昔の自分の型を見出すことが出来ません。今はただそれだけで喜んでおります。明日の日への真夜中に立ったわけです。第二年目は新しいものの発見に全力を注ぐつもりであります。(略)そして翌日の書き足しに「巴里に来てはじめて、今度の絵に名前を書き入れる事が出来ました。」と書いている。美校時代、師岡

田三郎助譲りの温雅な写生画に力量を発揮、在学中から帝展に入選していた鼎の、フランスに於ける勉強は、その自分の古い型をこわし、画面の構図に重点を置いた、近代的装飾性を目指すことにあつたと考えられる。



板倉 鼎 「金魚」

また、一九二七年一月一日付の妻須美子の手紙には次の様なエピソードが書かれている。「昨日から鼎さん金魚の静物を始めております。前から金魚が描きたいと申しておりましたが、売っている店がみつかりませんので断念致して居りました処、セーヌ河岸にやつとみつけて買つてまいりました。多分日本から来たのでしよう。二人きりのところへ金魚がたつた五匹ばかりふえましたのですけれど、大分淋しさがうすらぎます。」

外観は近代的で、また茶系統で統一してあり、重厚で落ち着いた感を受ける。室内は整然とし、自然に姿勢を正したくなる静かさを持つ美術館である。大小何室にも分かれ、同時に種々の展覧会ができるということは、主催する側には規模にあつた室が選べるという点で、目的を持つたものなら小展覧会でも受け入れてもらえそうだし、見学に来た側にとっては一度にいろんな傾向の作品が鑑賞できてありがたい。

談話コーナー

県立美術館を訪れるの感想

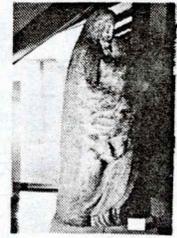
萩原美登里(習志野市)

くわかつた次第です。また展覧会場とは別に県民アトリエの方では県民の芸術性を高めるために多くの講座が設けられ、気軽に楽しむことができそうで、このことは素晴らしい考案だと心から感謝したい。私自身、こういった講座・展覧会に参加したいし、また教師として児童に役立つような展覧会は見学を奨励し、ぜひ鑑賞指導にも連れて来たいと考えている。

最近館に寄せられた意見を紹介いたします。

- 遠い地域でも美術作品を鑑賞できるように移動美術館等の回数を増してほしい。
- 企画展などもう少し柔軟性のあるものを企画してほしい。
- 「絵本展」というようなものを。
- 実物を見ることに意義があるとと思うが、館の収蔵品などを学校に貸出ししてほしい。
- 当館はゆったりと見られるところが良いと思う。
- スライドを使い作家や作品の解説をつくるべきだ。

美の泉



「仏を彫りながら、ひたすら仏を求めていくと、そこから感じられるものは、大自然の愛であり滔々と流れる大河のようなエネルギーである。」

これは長谷川昂氏の著書「仏を彫る心の一節である。氏は明治四十二年、千葉県鴨川市の生まれ、長狭中学(高校)の卒業生である。若い頃より武者小路実篤の新しい村に共鳴し農事の傍ら、絵画・彫刻・文学等の分野に独力で挑戦し青年文芸誌に寄稿した。

昭和六年、彫刻家を志して上京、日本彫刻会に入会し、佐々木大樹、内藤伸に師事し制作に励む。
昭和十一年、二十六歳のときに「はかけ」が文部省美術展に初入選し注目を浴び

た。以後、文展特選、無鑑査を経て日展審査員として活躍、昭和三十八年に国際美術展で「浄池」と題する作品で彫刻最高賞を受賞した。氏は得意とする鈍彫りの手法によって素材に備わる自然の美を生かし、素材で柔和な作品を数多く生み出している。

本館のアトリエ入口に置かれて「安息」と題する木彫をじっとみつめていると「私は木を彫る／木は彫られながら私に語る／木は素材の位置から立直って／きびしく私に迫る」やすらぎを与えてくれるのは大自然であり、大自然を愛して自分自ら大自然となることが仏を彫る心である。」という氏の言葉が作品から伝わってくるような気がする。

五十六メートルの高さのある東京湾観音と体内仏は昭和三十六年に完成したもので東京湾のシンボルとなっている。昭和五十二年には本県の芸術文化に尽くされた功績に対し千葉県教育功労賞が授与された。

(安増 順)

トピックス

本年度の実技講座のうち、デッサン入門講座(二期)と彫塑入門講座(二期)が終了しました。

デッサン入門講座は講師の戸田健夫先生のご指導によって二日間熱心に行われました。

特に今回は、木炭による石膏デッサンではなく、人物(着衣)を鉛筆で素描していく学習で、これまでのデッサン講座とは違った講座でした。

彫塑入門講座は、講師の青木三四郎先生のご指導のもとに、六日間首像の制作に取り組みました。

今回は昨年より講座期間を一日短縮したにもかかわらず石膏取りだけでなく、台座の



デッサン入門講座

作り方まで学習し、受講生の方々から好評を得ました。最後に合評会をして全日程を終了しました。

■ポランティア県外研修
六月十日、十名の解説ボランティアの方々が、東京のブリヂストン美術館、山種美術館を訪れ、大森、川口両先生の解説に耳を傾けた。

その後、円卓を囲み解説のポイントや留意点、さらに苦労話などもお聞きし、有意義な一日を過ごした。

■県立博物館・美術館利用促進のための協力校として、本年度は千葉市立新宿中学校(片平市朗校長)が委嘱されました。研究主題は「意欲的なクラブ活動等を展開するための効果的な美術館利用のあり方について」とし、本館の特展、企画展、その他の見学と「県民アトリエ」の利用が計画されており。

■本号三ページでお伝えした金工芸信田洋回顧展は好評のうちを終了しましたが、この回顧展に先だち、信田氏より次の十四点が寄贈されました。ご厚意にあつく感謝いたします。

- 「黄銅花いらす」「装瓶(楼)」「黒孔雀の瓶」「透壺」「銀壺(花)

- ひらく」「帯装瓶」「立姿瓶」「赤銅張小宮」「赤銅壺」「銀瓶(スクラム)」「乳装銀瓶」「銀瓶(マーキュリー)」「金彩壺」「金冠銅瓶」



装瓶(楼)

伝言板

■昭和五十六年度事業案内(七月〜三月)がこのほど発行されました。胸ポケットにたくれてしまふほどコンパクトなパンフレットですが、展覧会案内、開館時間等の利用案内、さらにバス時刻表つきの交通案内までも載せてあります。美術館受付で配布しておりますのでご利用ください。

■金工芸信田洋回顧展の図録の残部があります。ご希望の方は美術館学芸課までお問い合わせ願います。

■友の会では十月初旬に一泊二日の楽しいバス旅行を計画しております。詳細は会報「しおさい」でお知らせします。

◎第5回美術館夏季大学

本館では「みる・かたる・つくる」普及事業の一環として、本年も「美術館夏季大学」を開設します。今回は、昨年の明治・大正期の洋画史をさらに掘り下げると共に、日本画についても焦点をあてて開講します。のでふるってご参加ください。

一、主催 千葉県立美術館
二、共催 千葉県立美術館友の会

三、期日 昭和56年7月31日(金)8月1日(土)

四、時間 午前9時半～午後3時半

五、場所 「県民アトリエ」講堂

六、受講料 無料

七、内容(予定) 7月31日

●浅井忠と京都洋画壇 講師 高橋在久(本館館長)

●日本画の流れI(仮) 講師 細野正信(東京国立博物館主任研究官)

8月1日

●黒田清輝と白馬会の人々

講師 陰里鐵郎(東京国立文化財研究所主任研究官)

●日本画の流れI(仮) 講師 田中稜(美術評論家)

八、募集人員 二百名(応募者多数の場合抽選)

九、応募方法

(1) 往復はがきに住所・氏名・電話番号を明記して美術館研修班宛お申し込みください。

(2) 来館の際直接申し込みされても結構です。

お知らせ

◎デッサン入門講座(二期)

●期日 8月25・26日

●講師 羽生智樹

●定員 30名

●申込締切 8月11日(月)

◎てん刻入門講座(二期)

●期日 8月29日・30日

●講師 靈園鴻甫

●定員 30名

●申込締切 8月4日(火)

◎第2回「美術を語る会」

一、日時 8月8日(土) 午後2時～3時半

二、主題「浅井真の芸術」(仮)

三、講師(話題提供者)

●兼巻通高氏 (シニアディレクター)

●他関係者二名

◎団体展(7月～9月)

●第1回日本国際美術家協会展

7・28～8・2

●龍峽書道会千葉県人展

8・4～8・9

●千葉県写真家協会展

8・4～8・9

●第1回千葉サンケイ現代洋画展

8・11～8・16

●千葉市教職員美術展

8・18～8・30

●第11回いってふ会彫刻展

8・18～8・30

●子供と教師の作品展

8・25～8・30

●第10回写真千葉県展

8・25～9・6

●静雅書道会小中学部千葉地区展

9・1～9・6

●第8回文化書道千葉県連合会公募展覧会

9・1～9・6

来館者

5月

9 京都市美術館、浅井忠の作品を借用

11 サンケイ新聞社一名

16 鹿兒島市教育委員会次長

22 宮城県美術館開設準備室三名

25 木村賢太郎氏

27 市原市管財課四名

6月 2 太田美術館永田氏他二名

5 天津小湊町教育委員会

9 県下高等学校教諭百五十名

10 日動画廊

19 新潟市長他一名

日誌抄

5月

8 高等学校書道部会

9 洋画入門講座

12 彫塑入門講座(講師青木三四郎氏)

15 デッサン入門講座

28 日本教育大学協会第二部会書道部門会並びに全国大学書道学会

6月

3 解説員研修会

4 陶芸入門講座

18 定期監査

23 県博物館協会役員会・総会

24 解説員研修会

28 友の会美術鑑賞の旅(房総方面)

職員異動

昭和五十六年六月十六日付で次の職員が異動しました。

■転出者

高梨義男(教育庁福利課へ)

■転入者

内山昭氏(教育庁文化課から) 転出者の労をねぎらうとともに、新任者の今後の活躍を期待します。



浅井 忠自作印 (原寸)